

徳田秋聲をめぐる雑誌『あらくれ』の研究

——創刊から「紀伊國屋出版部」時代まで——

大木 志門

はじめに

本稿は作家・徳田秋聲を中心に刊行されていた雑誌『あらくれ』（一九三二年～一九三八年）の実態を明らかにしようとするものである。近年、有島武郎の個人雑誌『泉』（一九三二年創刊）や島崎藤村主宰の『処女地』（同前）など、作家がその刊行に積極的に関わった雑誌の研究が進んでいる。本稿も二〇二四年年度の島崎藤村学会で、藤村の雑誌出版への関わりを特集した「藤村周辺の有名／無名の書き手たち」「文学界」から『処女地』まで」（同年九月二八日、第五十一回全国大会、於東京外語大学）での発表「島崎藤村『処女地』と徳田秋聲『あらくれ』の磁場」が元になっている。ただし藤村が女性たちを集めて発行した「処女地」との比較を行った発表の中心部分（後述の『あらくれ』が女性会員中心で発行された時代など）については、次年度に同学会の会誌に寄稿予定であるため、ここではそこで詳述し切れないであろう、主に『あらくれ』の創刊時代から、文壇的には最盛期と

認識されている紀伊國屋書店が発行元となった時代までを追ってみたい。

一 雑誌『あらくれ』とその射程

先ほどその実態を明らかにしたいと書いたが、もちろん『あらくれ』をめぐる調査はある程度まで進んでいる。その最も重要な先行研究として十文字隆行「雑誌『あらくれ』目録・解題」（一九八五年七月『昭和文学研究』）があり、これにより『あらくれ』全号の寄稿者と掲載作品が既に詳らかになっている。十文字はそこで雑誌の概要を次のように簡潔にまとめている。

雑誌の形態は、第一輯から第三輯までパンフレットとして各十六頁。定価五銭。同人の原稿持ち寄りで、発行も不定期であった。昭和八年五月号から表紙、中表紙、目次がつき、頁数も増える。八月から九年一月まで空白があるが、それを埋めるように二月号では九四頁まで増大され、三月号から紀

伊国屋書店が発行所となつて経済的な援助もおこない、六十頁内外、月一回発行と安定する。特に昭和十年二月号から野口富士男が編集責任者となるに及んで、「発行日も定価も、旧来の或る意味ではルウズだつたとも云へる点から、一步跳びあがる筈だ」という後記のとおり、積極的な紙面づくりが図られた。編集を担当していたのは、そのほか岡田三郎、舟橋聖一、檜崎勤、阿部知二らであつた。／表紙絵やカットの有無等の変動もあり、定価は頁数にあわせて二拾銭から三拾銭の間。（中略）

十年九月号までは順調に刊行され続けるが、紀伊国屋書店の社内事情で援助が絶たれると、十二月から十一年二月までパンフレットに戻り、中断。十二年九月、秋声会の女性会員を中心としたあらくれ会によつて再刊。七十頁内外で、二拾銭前後、毎月刊行されたが、十五か月で、突如終刊を迎えた。執筆者総数は、頻度の違いはあれ、百五十余名に上り、身辺雑記を主体とする特異な雑誌の性格によるとはいへ、時代の側面を知るうえで有効な雑誌となり得ている。

もう一つの重要な先行研究である紅野敏郎『昭和十年代文学に関する一考察（上）』『あらくれ』『作家精神』をめぐつて（一九七二年五月『図書』、のち『昭和文学の水脈』収録、一九八三年、講談社）では、『あらくれ』は「大正末期の『文芸春秋』、あるいは『不同調』の小さきさみのエッセイ欄を再現しようなものとなつて」おり、『行動』に呼応する側面と、中村武羅夫・檜崎

勤らによつて象徴される新潮社がバックアップした『不同調』の側面とがにじみ出しており、それに加うるに、上司小剣とか近松秋江、あるいは室生犀星らのような秋声びいきの古顔の人びとのかもし出す側面」が重なっているとし、それは『新潮』にいた中村武羅夫との関わりがあるだろう」と指摘されている。それに対し十文字は、誌面には「プロレタリア文学、農民文学系、日本浪漫派の作家たちや多くの女流作家、国文学研究家、フランス文学者も顔を出して」いるとして、秋聲周辺の人物にとどまらない多彩な寄稿者を指摘していた。これに大きな異論はないが、ただし百五十余名とされている寄稿者は後述のように実際は百六十二名にのぼり、「身辺雑記を主体とする」性格は創刊当初にこそ当てはまるが以後は必ずしもそうではない。秋聲自身はのちに随筆集『灰皿』（砂子屋書房、一九三八年）と『老眼鏡』（高山書院、一九四〇年）にまとまるエッセイ「雑筆帖」を中心に寄稿しているが、その他の同人たちは小説や評論なども寄稿しており、『あらくれ』はそれらの貴重な発表媒体であつた。また編集責任者である野口富士男は編集実務担当であり、その奮闘ぶりについては後に紹介する。さらに、ここでは十分に論じられていない「時代の側面」との関わりについてもさらに検証されるべきであろう。その雑誌『あらくれ』の刊行状況をまとめると次のようになる。一九三二（昭和七）年七月十五日（第一輯）～一九三八（昭和十三）年十一月（六卷十一号）まで全四十四冊刊行されており、発行元ごとに大きく四期にわけられる。

第一期 秋聲会発行 徳田一穂編輯 一九三二（昭和七） 七月

（一九三四（昭和九） 年二月 七冊

第二期 紀伊國屋出版部発行 徳田一穂・舟橋聖一・阿部知

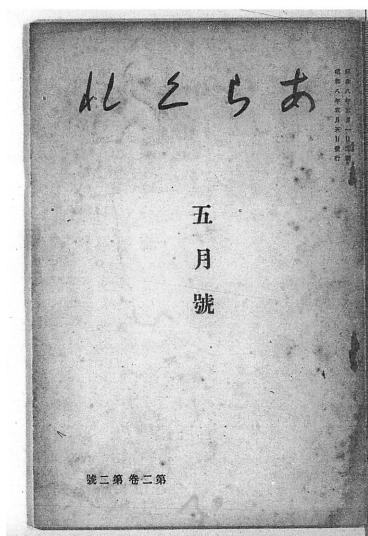
二・豊田三郎・檜崎勤・尾崎士郎編輯（編輯実務は野口富士男） 一九三四（昭和九） 年三月～一九三五（昭和十） 年九月 十九冊

第三期 秋聲会発行 徳田一穂編輯 一九三五（昭和十） 年十二月～一九三六（昭和十） 年二月 三冊

第四期 あらくれ会発行 小寺菊子・山川朱実・小金井素子・小城美知編輯 一九三七（昭和十二） 年九月～一九三八（昭和十三） 年十一月 十五冊

※奥付の「編輯兼発行人」は全期間を通じて徳田一穂

前述のように本誌は簡易なパンフレット形式で始まっており、巻頭の島崎藤村「京都日記」のほか、近松秋江、室生犀星、徳田秋聲、徳田一穂、井伏鱒二、尾崎士郎、舟橋聖一、阿部知二、榊山潤、岡田三郎、檜崎勤、中村武羅夫が随筆を寄稿している（図版1）。題字の「あらくれ」の文字は秋聲による揮毫である。発行元は東京市本郷区森川町徳田秋聲方の秋聲会、編輯兼発行人は徳田一穂となっている。同様の形態で不定期に第三輯まで出し、一九三三（昭和八） 年五月の第二巻第二号から表紙が付き、雑誌の形式となる（図版2）。本号は中村、犀星、吉屋信子らの「随想」に加え、「創作」として秋聲「お蝶夫人」が掲載されているのが目につく。以後、頁が増えて誌面に余裕ができたからか「随



図版2：『あらくれ』第二巻第二号表紙



図版1：『あらくれ』第一輯表紙

想」に加えて「創作」を掲載するようになり、その数も増えてゆく。一九三四（昭和九）年二月の第二巻（と記載されているが正しくは第三巻）第一号では、中村、舟橋、山川朱美、小城美知、阿部ら七本もの創作が巻頭から並び、新居格、板垣直子、福田清人の三人の外部寄稿者の随想も掲載されている。この翌三月より田辺茂一の紀伊國屋出版部が刊行を引き受けるようになり本格文芸誌的性格が強まってゆく。この紀伊國屋時代については後述するが、同社が一九三五（昭和十）年九月で撤退以後は秋聲会の発行に戻り、休刊を挟んで一九三七（昭和十二）年九月より女性会員中心の編輯となることで再び軌道に乗るも一九三八（昭和十三）年十一月号を出して予告なく終刊となる。

なお一九三八（昭和十三）年一月号の『あらくれ』に掲載されている同会の会員氏名は、阿部知二、岡田三郎、尾崎士郎、上司小剣、小金井素子、小城（小野）美知、小寺菊子、榊山潤、田辺茂一、徳田一穂、徳田秋聲、豊田三郎、中村武羅夫、檜崎勤、野口富士男、舟橋聖一、三上秀吉、室生犀星、山川朱実（北見志保子）の十九名であり、ここに結成に加わり途中で離脱した井伏鱒二の二十名ほどが中心メンバーと考えられる。なお、この井伏の脱退については杉山平助が高野三造名義で書いた一九三五（昭和十）年九月『中央公論』掲載の「井伏鱒二（のち杉山『街の人物評論』に収録、一九三七年、亜里書店）で、井伏が『あらくれ』を穩便に抜けるために榊山潤に頼んで井伏が寄稿を怠っていたと非難する手紙を出してもらい、それを受けて脱会届を出したことや、それは井伏が『作品』の同人を兼ねていて多忙で、「作

品側同人からいびられるのが苦しかったからだという説」が紹介されている。

次に『あらくれ』全期間の寄稿者リストを集計したところ、署名記事だけで全百六十二名の寄稿者があった（巻末資料）。このうち後述のように「二日会」の提唱者とされる三上秀吉が全四十四冊中で四十回も寄稿しており、そこに舟橋聖一と秋聲の最初期からの弟子である小寺菊子が三十六回で続く。その次に第四期『あらくれ』の中心人物である山川朱実（三十五回）と秋聲同郷の室生犀星（三十三回）、秋聲自身（三十三回）が多く、阿部知二（二十八回）、小金井素子（同）、徳田一穂（同）、豊田三郎（二十七回）、岡田三郎（二十六回）、檜崎勤（二十五回）、中村武羅夫（二十四回）、榊山潤（二十三回）、上司小剣（二十回）、小城（小野）美知（十九回）、野口富士男（同）、田辺茂一（十八回）、尾崎士郎（同）、井伏鱒二（十七回）あたりまでが常連寄稿者と言えよう。中村、犀星、小剣ら秋聲の旧知に舟橋、阿部、豊田、岡田、檜崎、榊山らの新進男性作家、小寺、山川、小金井、小城ら新旧の弟子筋の女性为中心である。以上はいずれも会員であるが外部寄稿者も多く、秋聲旧知の近松秋江、宇野浩二、正宗白鳥、島崎藤村などにとどまらず、翻訳も含め六回寄稿の飯島正を筆頭に、板垣直子（五回）、板垣鷹穂（四回）、中河与一（同）、春山行夫（同）、浅原六郎（同）、芹澤光治良（三回）など若手の芸術派の作家・評論家にも多く寄稿を求めたことが特徴である。これは徳田一穂や舟橋、阿部らの人脈によるところが多いのではない。他に宮地嘉六（四回）や青野季吉（三回）、和田傳

(同)、藤森成吉(二回)、窪川鶴次郎(一回)、中野重治(同)、宮本百合子(同)、徳永直(同)、島木健作(同)らプロレタリア・農民文学系の文壇人も目立つほか、福田清人(四回)、吉田精一(二回)、片岡良一(同)、塩田良平(一回)らのち国文学研究者として知られるようになる面々もいる。他にも林芙美子、川崎長太郎、上林暁、武田麟太郎、伊藤整、岡本かの子、吉屋信子、円地文子、田村俊子、高浜虚子、佐藤春夫、斎藤茂吉、千葉亀雄、片岡鉄兵、太宰治、牧野信一、張赫宙、平塚らいてうなどやや意外な人物も含めてかなり幅広い執筆者がそろっている。

紅野敏郎(前掲「昭和十年代文学に関する一考察(上)」)は文壇で担った本誌の役割を、野口富士男や豊田三郎が関わった『作家精神』(一九三六年創刊)と並べて次のように指摘している。

「あらくれ」「作家精神」「文学者」「新文学」、こういった雑誌群の果たした役割、あるいは、青年芸術派の実体についてはほとんどふれたものがなかったように思う。(中略)右の雑誌群、集団を一瞥して気がつくことの第一は、そのいずれもが昭和十年代のいわば強者集団でもあった「文学界」の成立基盤、雰囲気とは、ある距離を置いているということ。つまり非「文学界」ともいい得るような性格を持っていることであり、その第二は、これまた昭和十年代のいわば花形集団でもあった「日本浪漫派」の成立基盤、雰囲気とは異なった、いわば非「日本浪漫派」的特質を持っているものが多い、ということであろう。(中略)私はこの昭和十年代には、野口

富士男のような存在——それはのち「青年芸術派」(十返一、南川潤・田宮虎彦・船山馨・青山光二・牧屋善三・井上立士・野口富士男ら)に結集するメンバーをイメージしてもよい——が意外に多かったのではないかと思っている。

このように昭和十年代の文壇における非主流グループの中に『あらくれ』は位置づけられるというのである。野口富士男から当時の文壇の様子を直に聞いていたという紅野は、「そのような(注・前述の『文芸春秋』『不同調』的な)性格からはじまったにせよ、この徳田秋声及びその周辺の人びとの活動総量は、思いのほか深く大きく、昭和十年代、あるいはそれ以降の文学に鋭くくいこんでくるものがあることをあらためて認識する必要がある」とし、また「そうじてこの雑誌『あらくれ』の存在は、秋声個人の代表作『あらくれ』の著名さに比してきわめて影のうすい存在のように一般には見られてきている。たしかに時代の動向と鋭く向きあった、時代を左右する有力誌ではなかったが、ざりとて老秋声を慰める、家内的な一集団、とのみ見てはその実体にそぐわないと思う」と見ている。本稿もこの問題意識を共有するものであるが、ただし『あらくれ』は他の三誌よりも創刊時期が早いため、「昭和十年代文学」よりも前の昭和初年代後期から文芸復興期に至る文壇の問題系の中で検証すべきである。以下本稿では『あらくれ』の展開を追いながら、最終的には同時代の文壇の中でどのように位置づけられ得るかを具体的に見てゆくことにする。

二 「二日会」から「秋聲会」「あらくれ会」へ

この雑誌『あらくれ』を出していた「秋聲会」のち「あらくれ会」の前身は、もともと、「二日会」という一九二六（大正十五）年一月二日に妻（徳田はま）を亡くした秋聲を慰める目的で知友が結成した会であった。横関愛造「徳田秋声」（『思い出の作家たち』収録、一九五六年、法政大学出版局）は「徳田秋声をかこむ門下は、『あらくれ会』と『二日会』のメンバーがその中心であり、『二日会』は、徳田夫人の命日を記念してつけられたもの」として両者の関係を説明している。この「二日会」と「秋聲会」「あらくれ会」のメンバーは重複しており、また時期的にも近接していることから混同して語られることが多い。ただし、「二日会」はあくまでも親睦団体として秋聲を囲む会合を定期的に行う会であり、「秋聲会」「あらくれ会」も同様に定期的な会合（編輯会議兼懇親会）を開いていたが、そもそもは文学活動を行う集まりとして組織されたという違いがある。なお、「二日会」よりさらに当事者たちにも一様に用いられることが多い「秋聲会」「あらくれ会」の呼称の関係については後述する。

まず「二日会」について秋聲自身の言（「二日会」一九二六年四月十日『文芸時報』）に拠れば「この会は初め、婦人の友社の龍田（注・秀吉）君が云ひ出したもの」で「具体的に決めたのは、亡妻の初七日に燕楽軒へ集まつた時」ということで、この龍田秀吉、のち改姓して三上となった人物は、「婦人之友」編輯長から志賀直哉門下となった作家で後の「あらくれ会」の中心メン

バーでもある。またこの会は旧知の正宗白鳥、中村武羅夫や門下生の葛西善藏、川崎長太郎、安成二郎らを中心に古株の女弟子の小寺菊子や秋聲が懸賞小説で見出した吉屋信子らも参加し、老若男女の入り混じったものであったのも特徴で、秋聲は「元来、僕は斯ういふ自由な男女混濁と云ふやうな方面に這入つて行つたことが無かつたので、殊更、妻の死に依つて自由に這入つて行けるやうになつたことに喜びを感じてゐる」と書いている。当時の会は、文士に流行した洋行にも行けない貧乏な秋聲が「女流作家や不遇文士を集めて、例に由て文学を論じて御座る」（△□□「文芸雑事」一九二八年十一月十五日『日本及日本人』）と揶揄されたこともあったが、この世代や性別を超えて飲み食いしながら「文学を論じる」会は、プロレタリア文学流行の中で文壇的不遇にあった秋聲にとって慰安の場所であった。そしてこの「男女混濁」が雑誌『あらくれ』の性格にも継承されるのである。

この「二日会」は確認できる限り一九三一（昭和六）年一月までに秋聲宅や都内の飲食店、さらには旅行先で少なくとも全四十六回開催されたようである（ただしうち一回分の記録はなし）、以後自然消滅しようだが、一九三三（昭和八）年十一月に「更生第一回」が森川町の秋聲宅で開催されている。以上は現存する二冊の帳面「二日会記録」（『徳田秋聲全集 四十三巻』収録、二〇〇六年、八木書店）に拠るが、この名簿に掲載されているメンバーは記載順に以下の通りである。中村武羅夫、岡栄一郎、安成二郎、川崎長太郎、龍田秀吉、小寺菊子、小金井素子、山田順子、岡田初代、森田たま、衛藤欣（子）、水守亀之助、角田健太郎、

藤沢清造、左近益榮、足立欽一、岡田三郎、徳田秋聲、松原有義、三津木貞子、葛西善藏、吉屋信子、堀木克三、小野美知子、飯田眞一、平井程一、近藤英男、北見志保子、水町京子、久米正雄、室生犀星、小寺菊子、森田たま、岡田三郎、宮地嘉六、尾崎士郎、宇野千代、榊山潤、武川重太郎、蛭原福藏、牧野信一、吉屋信子、今井邦子、室生犀星、宇野千代、池田忠一、雨宮静子、窪川鶴次郎、廣津和郎、里見淳、翁久允、吉田甲子彦、松沢太平、檜崎勤、近松秋江、秀しげ子、海老原苔人、玉置真吉と計五十八名が記されている。ただしその全てが常連ではなく、各回に参加した者の名前と住所を帳面に記していた結果、これだけの大所帯になったと思われる、その回だけの参加者も多い。通常の会では中村、安成、龍田らの常連を中心に十名から二十程度の参加者であった。

のちの「秋聲会」「あらくれ会」のメンバーと一部重なっているが、この「二日会」が母体となって「秋聲会」が結成された経緯については、秋聲長男で会の中心人物の一人である徳田一穂が次のように書き残している。

確か、昭和七年であつたが、父が留守の時だつた――、門の開く音がして、出て見ると、七八人、どやどやと、門を這入つてくる客があつたが、それは中村武羅夫、岡田三郎、檜崎勤、舟橋聖一、阿部知二、尾崎士郎、榊山潤、井伏鱒二だつた。父の留守の旨を云つたが、父の文学が振わず、寂しうだから、元氣をつけるために、集まつて遣つて来たのだ、

と云うことなので、奥の父の書斎に通つて貰い、私は「縮図」のヒロインのところ（注・小石川白山で置屋を経営していた小林政子宅）に行つている父を迎えに行つて、父に、その旨を話し、父と二人で、指ヶ谷町から西方の高台に上るくの字型に曲つた石を敷いた坂道を登つて来たが、それまで、黙つていた父は、低い声で、「僕は長い間独りで遣つて来たんだから、寂しくなぞない」と、静かに一言云つた切りで、後は何も云わず、邸町を通り抜けて、皆んなの待つてゐる家へ歸つていった。――何年間か、『あらくれ』という雑誌を出していた「あらくれ会」というのが出来たのは、この日だつた。

徳田一穂「父の思い出」（一九五六年二月『小説新潮』、のち大木志門編『街の子の風貌 徳田一穂小説と随想』）

収録、龜鳴屋、二〇二一年）

この文献では「あらくれ会」となっているが、ここで発足したのが正確には「秋聲会」であることは次の新聞記事からわかる。

「秋聲氏を取り巻いて／『あらくれ』創刊／真正リアリズム文学の再検討」と言う見出しの記事が一九三二（昭和七）年五月五日『読売新聞』に掲載されており、「秋聲氏の文学的完成を積極的にならしめるといふのが『秋聲会』の目的」とあり、「一昨夜、本郷森川町の秋聲氏宅で中村武羅夫、室生犀星、尾崎士郎、岡田三郎、榊山潤、檜崎勤、井伏鱒二の諸氏が集まつて、第一回相談会が開かれ」て『あらくれ』といふ雑誌を先づ発刊して、真正リ

アリズムの再検討を為すことに決定した」とある。こちらでは舟橋と阿部の代わりに犀星が入っているが、ここからわかるのは「二日会」常連の男性作家である中村、尾崎、岡田、檜崎、神山を中心に、機関誌の発行を前提として「秋聲会」が成立したということである。実際に『あらくれ』創刊号奥付の発行元も「秋聲会」となっている。それがやがて、明治生命ビル下のレストラン「マーブル」を中心に毎月開いていた機関誌『あらくれ』の編輯打合わせと親睦のための会の呼称（『あらくれ』の会）が、通称「あらくれ会」として定着していったようである。そしてこの呼称が女性会員中心に編輯が行われた時代になり、正式に発行元の名前となったのだ。

前掲の横関『思い出の作家たち』には「徳田秋声と弟子たちとの関係は、先生と弟子といった格式張ったものではない。ある時は師であり、ある時は飲み仲間であり、ある時は話し相手でもあった。中には、食えなくなるとコロゲ込んだものもあり、飲みたくなると押しかけていく、といったものでもあった」とある。この「あらくれ会」の人々については多くの目撃談が残っている。たとえば三上秀吉「水の神韻」（一九五八年八月『新文明』）では「昔、徳田秋聲氏をかこむ『あらくれ会』というのがあった。私もその会員だったが、マーブルなどで月例会をもつた後、銀座へ出かけて、某喫茶亭へ入り、ピシ・ウォターをのんだりしていた。あらくれ会はあの喫茶亭をつぶすだろうというゴシップがとんだほどである」とふり返られている。また井上友一郎「居酒屋文士」（一九五一年三月『新潮48』）では「日華事変の始まる

頃には、いまの『コロンバン』のすぐ隣りに『東京茶房』という酒場があつて、ここには岡田三郎氏や徳田秋聲氏の所謂『あれくれ』会員の文士たちが、始終顔を見せてゐた時期がある」と書かれている。このように酒場での目撃談が多いのが特徴だが、十返舎「銀座文壇地図」（高見順編『銀座』収録、一九五六年、英宝社）でも「このテラス・コロンバンへは、横光利一もしばしば片岡（注・鉄兵）と来ていたが、徳田秋声をめぐる『あらくれ会』の面々がいつも多かった。すなわちその令息一穂、『新潮』編輯者で新興芸術派作家であつた檜崎勤、舟橋聖一、阿部知二、岡田三郎、田辺茂一などが街路に面した椅子にタムロしており、その光景は田村（注・泰次郎）や私などカケダシを威圧させた」とある。ちなみに十返も田村も『あらくれ』の寄稿者となっている。これらの証言から、会が当初宣言されていた「真正リアリズム文学の再検討」を行う勉強会的な性格ではなく和氣藹々とした親睦会的性格であつたと同時に、会員たちが当時の文壇においてそれなりの党派として知られていたことがわかる。

実際、会員達の回想も親睦の体験が多く、たとえば舟橋聖一「熱海という名の温泉街」（『風流抄』収録、一九五四年、文藝春秋新社）は「あらくれ会」の熱海旅行（一九三四年五月十二日、十三日）で舟橋が幹事をして同地の岡本旅館に宿泊した思い出を記している。そこでは「故徳田秋聲氏を先頭に、尾崎士郎や岡田三郎ら十何名という一行で、ダンスの好きな秋聲氏のために、熱海ダンスホールから、ダンサー数名を呼び、旅館附のホールで、大いに踊つたことがある。（中略）秋聲氏は、すでに還暦を越し

ていたが、溜池のフロリダや、飯田橋のホールで盛んに踊り、熱海へ来ても、温泉ダンサーとラストまで、踊っていた」という。最初の本格的な秋聲文学の評論書とも言うべき『徳田秋聲』（一九四一年、弘文堂書房）を著した当時の門下生の中心的存在である舟橋は、「秋聲先生の思ひ出」（一九四四年一月『文芸春秋』）では「先生は私に対しても、ごく年の若い友人に対するやうに対されたにすぎなかつた。私も亦、いはゆる門下生としての礼を執らず、小説を見て貰つて叱正を受けたといふやうなことも一度もない。（中略）旅行をしても、先生はいつもと同じ態度であつたから、宿屋などでも、あまり大家あつかひは受けなかつた」と書き残している。

三 雑誌『あらくれ』を構成した同人たち

この『あらくれ』に集まつた作家たちの性格をもう少し明らかにしておきたい。次に紹介する舟橋と並び中心メンバーの阿部知二および尾崎士郎の証言から、やはり『新潮』系や『不同調』系の作家たちが秋聲会に流れ込み、特に小栗風葉門下で新潮社にいた中村武羅夫がかなり幅を利かせていたことがわかる。

昭和十年前後の「あらくれ」の会のことも、「新潮」との聯想によつて浮かびあがつてくる。「あらくれ」とは、いうまでもなく徳田秋聲の名作の題であるが、中村武羅夫が、その名のもとに、秋聲をいだいてつくつた集りであつた。（中略）舟橋や私が入つたのは、やはり「新潮出身」だつたからであ

ろう。中村武羅夫などには、多かれ少なかれ、「文芸春秋」に張合う氣があつたことはたしかだ。

阿部知二「あらくれ残党」（一九五五年四月『新潮』）

不同調が廃刊されると、時をうつさず、徳田秋聲先生を中心とする「あらくれ会」が結成された。これは純然たる文学研究を目的とする団体で、先輩格には上司小剣、近松秋江、加能作次郎、中村武羅夫の四氏。同輩では岡田三郎、阿部知二、舟橋聖一、井伏鱒二、榊山潤、田辺茂一、豊田三郎、野口富士男の諸君。そのほか、先生には女の門下生が多いので、森田たま、小寺菊子、小金井素子、山川朱実といふやうな人たちがあつまつた。林美美子氏も、ほとんど会合がひらかれるごとに出席してゐたが、彼女は同人ではなかつた。

この「あらくれ会」に、依然として重きをなすものは中村武羅夫氏で、彼は極端な潔癖である上に、病的といつてもいいほど神経質で恰かも相撲部屋における若者頭の觀があり、秋聲先生の家庭では、私的生活のあらゆる面に意見を提示する特権的な立場を持つてゐた。

尾崎士郎「愉しきかな文壇」（一九五三年七月『新潮』、

のち『酔中一家言』収録、一九五六年、講談社）

尾崎はここでの中村との確執をたびたび語っているが、彼らのような若手からすると中村はかなり煙たい存在であつたはずだ。なお無署名「文壇往来」（一九三二年六月『政界往来』）は「今度

の『秋聲会』は機関雑誌なども持つのだと、監事の一人岡田三郎なんか、大変力んでゐる。中村武羅夫と共に牛耳を取つてゐた二日会も解散し、不同調も廃刊し、文壇株式の映画会社もつぶれてしまつた今日、閑散になつた岡田三郎が、今度は老をかついで文壇の野心を満足させようとしてゐるかにも見える。愛すべき文壇政治家岡田三郎先生！」とそれらの人脈を渡り歩く岡田を揶揄しており、会の性格はそうのように当時の文壇人から認識されていたのであろう。

別の興味深い証言として翁久允のものがあり、翁は富山出身で竹久夢二や大泉黒石との交友で知られる海外体験の豊富な文学者だが、彼によると所謂「十三人倶楽部」が「あらくれ会」の源流であるという。

(注・雑誌『十三人倶楽部』の)第二輯を出そう出そうと言つてゐる間に、私は竹久夢二とともに渡米するようになり、さらに帰つてから支那大陸を南下し、印度仏跡巡礼をやるなど、二年余の空白をもつようになった。(中略)その間に十三人の連絡や調和がうまく行かなくなつたらしく、私が帰つてきたときにその仲間が歓迎会を銀座のある場所で開催してくれたが、その時は徳田秋声も参加していたし、小寺菊子、今井邦子といった女性も混つており、龍胆寺とか久野、飯島などといった顔がなかった。そしてその時の会合からそれらのメンバーを中心に『あらくれ』会にしようということになり、十三人クラブは何らの声明もなしにいつの間にか影

をひそめてしまつた。『あらくれ』とは徳田秋声の有名な作品でそれを記念しようというのであつた。そして『あらくれ』という小雑誌を発行するようになり、この仲間が執筆した。

翁久允「わが一生 帰国篇(28)」

(一九六七年五月「高志人」)

以上のように、一九二九(昭和四)年に新潮社の『文学時代』や『新潮』で活動していた中村武羅夫、加藤武雄、檜崎勤、佐佐木俊郎や『不同調』の後継誌『近代生活』の同人である浅原六朗、久野豊彦、龍胆寺雄、尾崎士郎、嘉村磯多、岡田三郎、飯島正、さらに川端康成、翁久允により結成された反マルクス主義文学を標榜した芸術派作家の集団「十三人倶楽部」が「あらくれ会」の母体であるというのだ。翁は「わが一生 印度旅行後(1)」「一九六九年十月「高志人」」でも『あらくれ』に「十三人倶楽部」が流れ込んで行つた」と記しており、これは翁の主観的回想ではあるが、少なくとも『あらくれ』は昭和の初めにプロレタリア文学全盛期に不遇だった芸術派の作家達が自らの居場所を求めて作つた雑誌という性格が強かつたとは云えるのではない。ここから飯島正や浅原六朗が『あらくれ』に寄稿した関係性もわかるが、そのような人脈的繋がりとともに、一九三二(昭和七)年の段階で作品の発表場所として切実に『あらくれ』が求められたのが創刊の要因と考えられるのだ。つまり老大家の秋聲に庇護される、非主流の若手芸術派作家たちの拠点として『あらく

れ』は機能していたのである。

四 紀伊國屋出版部時代の『あらくれ』と 編輯者・野口富士男

創刊当初の『あらくれ』は、秋聲長男で売り出し中の作家でもある徳田一穂が中心に編輯を行っていた。先に記した通り、十六頁の小冊子であった『あらくれ』が次第に雑誌らしい体裁を整えてゆく様子が誌面からうかがえる。とはいえそれは簡単ではなかったようで、徳田一穂『『あらくれ』の記』（一九三三年五月『あらくれ』）によれば、「丁度昨年の五月三日の夕方皆さんが集つて、何か雑誌のやうなものをなさうと云ふ事で、それから出来上つたのが、『あらくれ』と云ふパンフレットである。さうしてまる一年の間に第三輯までしか出なかつたのは大へんに残念なことだと思つてゐたところ、四月三日の集りの夜、これからは表紙を付けて、なるべく雑誌風のものにして、とに角月に一回づつ出さうではないかと云ふ相談が纏つた。さうして二十日頃までには六月号を作る筈であつたのが、ひどく遅れて仕舞ひ、四月ももう一日二日と云ふ今日になつてやつと印刷屋の方の片が附いたと云う次第である」という。この号から表紙が付き雑誌の形態が整えられたが、翌月の徳田一穂「後記にかへて」（一九三三年六月『あらくれ』）には「六月はもつと早く出す積りであつたのが、どうも又遅れて仕舞つて残念です。少しづつ早く出すやうにしたいものだ」と心掛けてゐます」とあるように、なかなか雑誌の刊行は軌道に乗らなかつた。そこで月刊を維持するために一九三四（昭

和九）年より小寺菊子や三上秀吉ら二日会時代からの古株の会員が協力するようになり、そして同年三月より田辺茂一の紀伊國屋出版部より刊行することになった。これについても徳田一穂の証言が残っている。

それから暮に、（注・一九三三年）十二月の集りを山水楼でやつた時、それまではばらばらと顔の欠けてゐた月々の集りであつたが、その時は久振りに同人全員の顔が揃つて、もう少しちゃんと印刷物を出していきたいもんだと云ふ事に皆で話が纏まつた（中略）どうも毎月雑誌を出して行くのには少数の同人では負担が大き過ぎるので、今年の始め頃から新しい顔ぶれが、『あらくれ』の会に増えるやうになつた。

——三上秀吉、小寺菊子、今井邦子、山川朱実、森田たま、小金井素子、小城みちらの諸氏である。

しかしそれでもまだ困難であつたのだが、大へん嬉しい事には田辺茂一氏の好意で三月から、この『あらくれ』を紀伊國屋書店から出して貰う事になつた。

徳田一穂『『あらくれ』の会』（一九三四年六月『文藝』）

その紀伊國屋への発行元の移行は、『あらくれ』本誌では巻末の「あらくれ会」欄からうかがうことが出来る。

『あらくれ』（注・一九三四）年二月号の会合を十三日六時からグルル銀座で催す。（中略）二月号は今までにない九十

四頁もの頁数であり、非常に生き生きとして来たのは大変嬉しい事である。さうしてその上もつといい事には必ず十七八日頃に『あらくれ』を発行する事が確実となつた事である。

それはこの不安時代の中であらゆる方面に触手を差廻してゐる新しく動きつつある文学のよき理解者である田辺茂一氏が、この『あらくれ』を心よく引受けて出版してくれる事になつたからである。(徳田一穂)

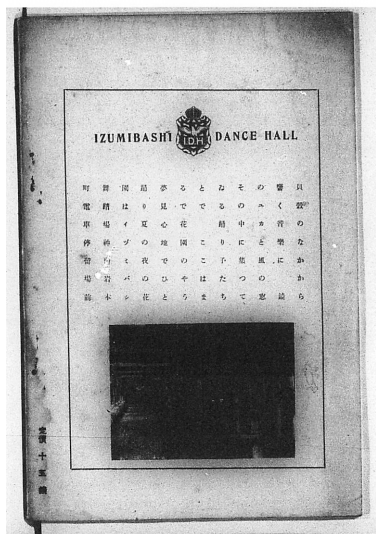
あらくれを今度、店から出すことになつたのは大変、光榮で有るし、且つ心愉快的。この雑誌は儲からなければ損をするが、儲かれば、一杯呑めるし、溜まれば、芸術家の俱樂部でも拵へようと云ふ示唆に成る。(田辺茂一)

「あらくれ会」(一九三四年三月『あらくれ』)

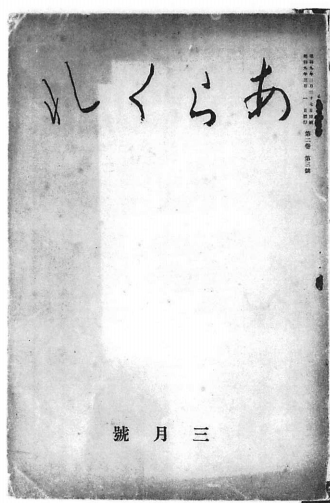
この「あらくれ会」欄(のち「あらくれ同人語」「同人語」など)は本号から始まり、同人たちが会合の席上で小文を記しそれを毎号そのまま掲載したユニークなもので、雑誌や会員の様々な動向を知ることができるという意味でも貴重である。ここで田辺茂一は「この雑誌は儲からなければ損をするが、儲かれば、一杯呑めるし、溜まれば、芸術家の俱樂部でも拵へよう」と冗談めかして記しているが、版元の紀伊國屋書店(一九二七年創業)は和田博文「紀伊國屋書店という文化装置——『紀伊國屋月報』『レツェンズ』を中心に」(二〇〇六年三月『昭和文学研究』)がまとめるように文学青年である田辺の方針で他の書店が扱わないプロレタリア運動の資料や同人雑誌をおくという戦略でインテリ青年

を中心に人気を集めていた。また出版活動も盛んで、雑誌も複数刊行していたことで知られ、前年の一九三三(昭和八)年六月には紀伊國屋出版部を別途創業したところであった。『あらくれ』はそのような紀伊國屋の資本が入ることで頁が増え広告が入り、本格的な文芸雑誌化してゆく。なお奥付の「編輯兼発行人」は徳田一穂で変更なく、発行所は当初は「紀伊國屋書店」で一九三四年八月から「紀伊國屋出版部」となっている。ちなみに一九三四年三月の裏表紙の広告が、秋聲が師事し、また後援会の会長も務めていた玉置真吉が講師を務め、また秋聲も通つた和泉橋ダンスホールである(次頁図版3・図版4)。

それまでと同様に誌面の柱は「随想」と「創作」(一九三四年七月より「小説」欄となる)であったが、飯島正によるアンドレ・ジイドの翻訳「ユリアンの旅」(一九三四年三月)に加え、一九三四年八月の「山川湖」、翌月の「わが文学について」などの特集記事が掲載され、同号より「評論」が掲載されている。本号の「評論」として春山行夫「『文学の考察』に就て」と並んで掲載されたのが岡田三郎「『町の踊り場』を読む」であったが、これが翌十月より「徳田秋聲研究」の連載となり、小寺菊子、中村武羅夫を筆頭に、三上秀吉、今井邦子、井伏鱒二、室生犀星、西田義郎、阿部知二、坂本浩が寄稿しており、秋聲文学の初期研究文献として貴重な蓄積をもたらしている。同年十一月号には「あらくれ座談会」として「プロレタリア文学の将来、文学の政治性、紅葉・鏡花の文学、『ダイヴィング』検討」が話題になっており、かなり文壇時事的な座談会が三号連続で掲載されている



図版4：同裏表紙広告



図版3：『あらくれ』第二巻第三号表紙

（これについては後述）。また一九三五（昭和十）年二月からは秋聲「彼女たちの身のうへ」に対する評を皮切りに、同人たちの小説合評も掲載されるようになった。外部からの寄稿者も次第に増えてゆき、この段階になると同人誌というよりもすっかり本格的な文芸誌の相貌を見せている。

次の「あらくれ会」欄における岡田三郎の言葉は、これにつれて会自体が活性化してゆく様子がよく表れている。

今夜は女のひとが大勢みえて、いくらかいつもよりは賑かなやうな気がする。『あらくれ』も少しは人気が出て来たものと見えて、出不精な女の人達も、それにつられて出て来るやうになつたのだらうと解釈しては、叱られるかしら。森田たまさんも暫くぶりだつたし、小金井素子さんも、随分久しぶりのやうに思ふ。小寺菊子さんは、この会にははじめてではないかと思ふ。（中略）山川朱実さんや小城美智子さんは、よく出てくれてゐるやうだ。（三郎）

「あらくれ会」（一九三四年五月『あらくれ』）
このように女性会員たちの参加も増えていったようだが、同号同欄の舟橋聖一の文章には「しばらく大阪へ行つて帰つて来たら、『あらくれ』四月号が一冊もなくなつてゐた。（中略）あと二百三刷り増したらどうですか」とあり、紀伊國屋書店の店舗を中心に店頭販売もされていたらしい雑誌は一定の読者を得ていたようである。

その実際のな力となったのが、戦後に秋聲の本格的な伝記『徳田秋聲傳』（一九六五年、筑摩書房）を著すことでも知られる小説家の野口富士男である。野口はこれがきっかけで最年少の『あらくれ』会員にもなるのだが、文化学院を出て数えて二十四歳という若さだった野口が最初に本誌の編輯に関わった一九三五（昭和十）年二月『あらくれ』の「編輯後記」には、「今号から本誌の編輯事務は僕が責任を持つてやるやうになつた、もつとも岡田三郎、舟橋聖一、徳田一穂の三氏があて、本当の編輯の仕事はやつて戴けるのだから、僕はただ事務的に仕事を進捗させていければいい、だけのことである。（中略）しかし、本誌は、本号を機として、発売日も定価も、旧来の或る意味ではルウズだったとも云へる点から、一歩跳びあがる筈だ」という意気込みが記されている。ここから岡田三郎、舟橋聖一、徳田一穂がおそらく記事の構成などを決める役割で、野口が実務面を担っていたことがうかがえる。さらに「今月から岡田三郎氏、舟橋聖一氏、徳田一穂氏の後を受けて、檜崎勤氏と阿部知二氏の二氏が編輯を受持たれるやうになつた」（「編輯後記」一九三五年五月『あらくれ』）とあることから、ここで檜崎と阿部にその役割が移ったようである。舟橋はこの号の「あらくれ同人語」（一九三五年五月『あらくれ』）で「編輯を檜崎阿部両君に引継いだ。面目一新を期待する次第だ。（中略）阿部君は近ごろニコニコして、大分人相がよくなたやうだから、この二人が編輯すれば、アラクレももう少し売れるやうになるものと思はれる」と記しているが、舟橋、阿部を中心にいずれもこのころ気鋭の作家として活躍している面々であ

り、彼らが実質的な雑誌の舵取りを行っていたのである。
同年三月の編輯後記では、その改革の成果が表れたことを野口は次のように記している。

先号の此の欄でお約束したやうに、発行日の方もどうやらこれまでの不面目だけは取戻すことが出来たやうである（中略）これまでも同人のうちの誰かがその月の何処かの雑誌に発表した創作の批評を本誌上でする例はあつた。しかし、それも試みられる時とそうでない時とがあつたのだが、今後はそれも出来るだけやつてゆくことにした。（中略）本誌の前号はかなり売れたやうである。同人諸氏が締切日を守つてくださるので発行日も確定してゆくのだし、読者諸氏も安心して下さるからだらうと思はれる。（中略）尚ほ先日以來、本誌の編輯事務に就いて、永田逸郎君に大変なお世話をかけである。

Ｆ・Ｚ（野口富士男）「編輯後記」

（一九三五年三月『あらくれ』）

ここで名前の登場する永田逸郎とは後にアフリカ関係の研究やフランス文学の翻訳で知られる人物（野口より二歳年長）であり、一九三一（昭和六）年に東京外国語大学フランス語科を卒業した後に野口の補助として編輯事務に関わつたことになる。雑誌が拡大してゆく中で野口一人では追いつかなくなり助手を求めたのであろう。野口の『いま道のべに』（講談社、一九八一年）に

は永田が野口に半年遅れて紀伊國屋出版部に入社し、雑誌『行動』の編輯長・豊田三郎とともに雑誌を作っていたことが記されている。後述するように、この紀伊國屋との人脈的交流がこの時期の『あらくれ』の最大の特徴である。さらに野口による編輯後記を概観してゆくと、雑誌が次々に新しい試みを行っている様子がわかる。

二月号からは児島善三郎氏の御助力によつて表紙も整ひ、本誌の面目は一新をしたのであつたが、更に今号から「・ン・ヰ（美術新青年）」による若き諸氏によつて提供された斬新なるカットを入れることが出来るやうになつた。（中略）荒木剛、濱谷次郎、加藤文雄、武藤忠、横地康國、永井宏の諸氏に感謝をする次第である。

野口富士男「編輯後記」（一九三五年四月『あらくれ』）

あらくれ「同人語」が久しぶりに復活されることになつた。これはまづたく本誌独自のものである。（中略）表紙は独立展の妹尾正彦氏にお願いしたが、早速に御快諾を得て、大変に立派なものを戴くことが出来た。

野口富士男「編輯後記」（一九三五年五月『あらくれ』）

今号の新しい試みとして、同人と同人以外の方とで手紙を交換して戴いた。

野口富士男「編輯後記」（一九三五年六月『あらくれ』）

猶本月号の表紙は特に野間仁根氏にお願いした。

無記名「編輯後記」（一九三五年八月『あらくれ』）

この野口が編輯者として従事した数カ月間が前述の同人の作品評が継続して掲載され、徳田一穂、豊田三郎、福田清人らによる「文芸時評」が月号掲載されるなど誌面が最も充実した期間であろう。ただし一九三五（昭和十）年九月の「編輯後記」には「完全に可能性のある範囲でもつて精一杯の編輯プランを企てた九月の躍進号ではあつたが、いざ出来上つてみると、まあざつとこれくらいのものであつた。（中略）これは会員諸氏が何処かへそれぞれ出かけられてゐて、東京へ残つて居るものが僅少であるためでもあるのだらうから、秋にでもなつて東京へ歸つて来られたら、また大いに努力されることであらうと、それを楽しみに待つてゐる」とあり、抑えた筆致であるが、計画通りの誌面が作れないことに苛立っていることがうかがえる。なおこの号から会員が毎月巻頭に新作小説を書く計画になっていたが、そのトップバッターを務めるはずの秋聲が肺氣腫になり、替わつて徳田一穂が「会の後」を寄稿している。そしてこの号を最後に『あらくれ』は突如休刊し、紀伊國屋時代は終わりを告げるのである。この時は夏であるため避暑で同人たちがつかまらなかつたようだが、阿部、舟橋、尾崎をはじめ雑誌の主力となつてゐる男性若手同人たちがそれぞれ人気作家となり、『あらくれ』になかなか手が回らなくなつていたのであらう。特に彼らが力を入れていたのが、同じ紀伊國屋出版部が発行していた雑誌『行動』（一九三三年十月

創刊)であった。

五 行動主義文学の中の『あらくれ』

紀州備長炭を商う実家の炭問屋「紀伊國屋」という資本を背景としながら新宿角筈に紀伊國屋書店を興し、俗に「新宿文化」と総称されるような一時代を築いた田辺茂一は、後年より雑誌『あらくれ』についていくつかの証言を残している。その中の一つが『手がけた同人雑誌9 『行動』と『あらくれ』』（一九六九年一月『三田文学』）である。

丁度、そのころ、徳田秋声門下の、たしか「廿日会^(マヤ)」という会を作っていた人々が、機関誌『あらくれ』を出していた。／『行動』を刊行していた関係もあり、その廿日会の連中とも親しかったので、途中からその『あらくれ』も、紀伊國屋が引き受けるように成った。／(中略)『あらくれ』の月例会は、丸ノ内掘端にあった明治生命ビル地階のレストラン『マーブル』でひらかれたが、これには秋声先生との交友もあって、正宗白鳥、近松秋江、中村武羅夫氏らも、時折り、顔をみせた。

このように田辺が一九三三(昭和八)年六月に紀伊國屋出版部を作り、同年十月より『行動』を刊行していたことが、田辺が自身も参加していた会の機関誌『あらくれ』を自社で引き受けた理由であった。野口富士男も、もとは紀伊國屋書店の雑誌『行動』

の編輯部にいたのを『あらくれ』の編輯を兼任させられたのであった。野口は「先生」(一九七〇年三月『道路』)で「私は昭和八年の秋に、田辺茂一氏が主宰していた『行動』という雑誌の編集部へ就職したが、徳田先生とその雑誌社とは特別な間柄にあった。そして、その雑誌の編集顧問をしていた舟橋聖一と阿部知二の両氏が先生の門下というか、先生を中心とする十余名の文学者の親睦グループ『あらくれ会』の会員であつたところから、私も社長の田辺茂一、編集長の豊田三郎氏につづいて、いつか会員にくわえられるようになった」と記している。舟橋聖一と阿部知二が同誌の編輯顧問であつたということであり、つまり『あらくれ』と『行動』の人脈はもともとかなり接近していたことになる。

雑誌『行動』は文芸復興期の純文学雑誌創刊ブームの中で生まれた新興雑誌であり、文芸雑誌から出発し次第に政治や社会などの時事的な記事も扱う総合雑誌へと拡大路線を取ってゆく。特に仏文学者の小松清が紹介した行動主義文学の思想と共鳴しながら『行動』は文芸市場で存在感を高めていった。プロレタリア文学運動壊滅後の文壇で、文学者が知識人としていかに現実社会に関わるべきかを問題にしたのが行動主義の文学であつた。

安藤一郎「新宿の青春」(一九五四年五月『机』)は新興芸術派から行動主義文学までの人脈の連続性を次のようにまとめている。

新興芸術派が起り、「詩と詩論」が発刊された前後、中野

会（注・百田宗治、福士幸次郎、春山行夫、伊藤整ら）というのが出来、鍋屋横町の「メイフラワー」という喫茶店で、若い詩人や作家が第一日の顔合せをやった時のことも忘れられない。（中略）それから二、三年たつて、紀伊國屋から『行動』という雑誌が出て、それに寄稿したのは、中野会を中心としたメンバーだった。「行動の会」はその続きのようなものだったが、小松清、新庄嘉章、豊田三郎といった人々とも知り合った。紀伊國屋には、秋聲を中心とするあらくれ会があり、「レッツエンズ」という月報も出ており、いろいろ文化人の往来がしきりだった。

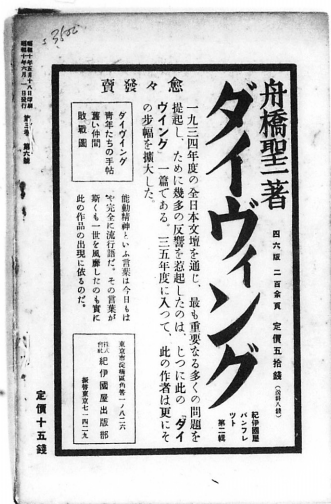
この中では『行動』の編輯長でもあった豊田三郎が直接的に『あらくれ』に関係しているが、この豊田は紀伊國屋出版部から出した『弔花』（一九三五年）で芥川賞候補となり、行動主義の作家として注目されるようになる。『文芸都市』の同人で阿部知二、井伏鱒二、梶井基次郎、外村繁らと「新人クラブ」を、小林秀雄や井伏鱒二らと「新興芸術派クラブ」を結成した舟橋聖一が発表した『ダイヴィング』（一九三四年十月『行動』）は行動主義文学の代表的作品として知られている。このように一九三四（昭和九）年から三五年の『あらくれ』は紀伊國屋とそれが推進する行動主義文学の圏内にあったということだ。ちなみに春山行夫と伊藤整が『あらくれ』の寄稿者であることは既に述べたが、小松清と百田宗治も寄稿している。

さらに、この版元を同じくする『行動』と『あらくれ』が人脈

だけでなく内容的にも接近してゆく様子が、この時期の『あらくれ』の誌面から浮かび上がってくる。『行動』『レッツエンズ』の各号や阿部知二「文学の考察」（一九三四年七月、紀伊國屋出版部）、田辺茂一編『能動精神パンフレット』（一九三五年二月、同前）、舟橋聖一『ダイヴィング』（一九三五年五月、同前）、小松清『行動主義文学論』（一九三五年六月、同前）などが誌上で大きく広告されているのは同じ版元なので当然と言えば当然だが（次頁図版5・図版6）、誌面の方にも中村武羅夫「文芸院の問題と文学者」（一九三四年八月）、豊田三郎「作家のなかに現実を」（一九三四年九月）、青野季吉「およそ転向及び転向作家について」（一九三四年十月）、豊田三郎「文学者の行動」（一九三五年五月）、窪川鶴次郎「文学の再認識時代」（一九三五年七月）、舟橋聖一「主体と客体」（同前）、豊田三郎「国際性と文学」（一九三五年八月）のように『行動』の能動精神や行動主義に共鳴する文章や企画が盛んに掲載されるようになる。さらに岡田三郎「『行動』の公開状に対して」（一九三四年九月）は『行動』の同年九月号の市川為雄の文章に答えたものであり、「あらくれ同人語」（一九三五年六月『あらくれ』）では岡田三郎が「『行動』五月号の一穂君の『マニフェスト』は立派な態度だと思つた」と記すなど、執筆者を共有する両誌が越境的に言及されている様子がうかがえる。この「マニフェスト」とは、徳田一穂が私娼窟の女性を連れ出して自由廃業させたことを、一九三五（昭和十）年三月四日付『東京日日新聞』に報じられ、一穂がこれに對して「マニフェスト―救出事件に関連して」を『行動』に発表して反論を



図版5：『あらくれ』第三卷第四号中扉と広告



図版6：『あらくれ』第三卷第六号裏表紙広告

行ったものである。^⑤「あらくれ座談会」（一九三四年十一月）でも文学の政治性や舟橋『ダイヴィング』が話題になっているが、特に「文学の積極性座談会」（一九三五年一月）は十文字隆行（前掲「雑誌『あらくれ』目録・解題」）が「このころの能動精神、行動主義盛行の反映」と指摘するものである。

このような『行動』と『あらくれ』に対しては、文壇でもセツトで語られている様子がある。

それ（注・「文芸復興の問題」「新人待望の機運」「転向作家の問題」「能動的精神の問題」などの流行）に対応して文芸雑誌界にも色々の変動が相ついで起つてゐるが、何と云つても「行動」の躍進ほど印象深いものはない。（中略）

（注「新潮」には）現象的把握の点に於ても常に「行動」に

劣る観があり、執筆者の顔ぶれも『行動』以上には出でてゐない。党派的な意味から見ると、あたかも両誌は親類兄弟のやうだ。その中間的存在に徳田秋聲氏を中心とするあらくれ会の機関誌「あらくれ」がある。今の所頁数は僅少でもあり、これと云ふ程のものではないけれども、たゞ一文人を中心とする会の機関誌であると云ふ特異性と、かなり健全なその發展と進出には一応注目してゐる。

野村平五郎「昭和九年度出版界展望 文芸雑誌の変転」

(一九三五年一月『書物展望』)

新興芸術派を呼んで新宿文芸派と悪口するひとがあるが、こ、新宿角筈の紀伊の国屋の田辺茂一、炭屋ののれんを本屋に改め従来も「文芸都市」「アルト」などを出してゐたが、こ、に一軒「行動」の新店を出した。編輯は帝大出身の豊田三郎がやつてゐるが、舟橋聖一、阿部知二の二人が顧問格といふ街の噂。「行動」の他に「レツエンズ」「あらくれ」「演劇学」「詩法」と四つ出してゐるが、どれもこれもいろいろとりどり、かんじんの「行動」がはえないのはどうしたことであるか。こ、に天下る徳田秋聲の一派「新潮」の檣崎と通ずるといふが嘘か誠か。それぢや「行動」も「新潮」も同じことだとは、あんまり穿ちすぎてゐる様である。

酒井堅三「文壇辻斬帖」(一九三四年十一月『政界往来』)

前者では人脈の共通する『新潮』の保守性を批判しながら相對

的に『行動』『あらくれ』を並べて評価しており、後者では『行動』を批判しつつ同誌に秋聲の周辺人脈が多いことから旧来の『新潮』との違いがないと揶揄されている。『あらくれ』誌上でも『行動』編輯長である豊田三郎の「最近アラクレの集りは毎月九日夜丸ノ内マールブルで開かれてゐるが、先月出てみると檣崎氏がもう翌月の新潮を持つてゐた。然るに『行動』の方は当日校了にもなつてゐなくて甚だ残念であつたが、今夜は『行動』もふんばつて発売日を繰りあげたおかげで、配本されたばかりの『行動』を持つてゐることが出来た。舟橋氏がこの二誌を並べて批判顔をする。そこへ読売の梶原氏が写真をとりに来て、檣崎氏が『新潮』をかかげ、小生が『行動』を差上げたところをパチリと撮る」(『あらくれ会』一九三四年九月『あらくれ』)という文章が載つていたり、『文芸雑誌が揃つて発行日を早くしてしまつたので、『あらくれ』もそれ相当に早くしてはと言ふのだ。いつも九日の『あらくれ』の会には『新潮』と『行動』の見本が出来てきて、自然この二つの雑誌で座は賑ふがかうなると『新潮・行動』の会か『あらくれ』の会か、解らなくなつてしまふ」(岡田三郎『あらくれ会』一九三四年十月『あらくれ』)という言も見られたりして、会員たちの方にも『行動』や『新潮』と『あらくれ』が混じり合つてゐるという状況への自覚があつたようだ。

とはいえ、この状況も長くは続かなかつた。紀伊國屋出版部が倒れたからである。田辺茂一の回想(前掲「手がけた同人雑誌9『行動』と『あらくれ』」)によると、『行動』は「ジャーナリズムに於ける人氣は、かなりのものであつたが、経営は赤字であつ

た」ので、田辺はつてのある関西方面にまで広告取りに出かけたがやはり赤字続きで、父親の病気をいいことに実家の土地を担保に借金までしたが、結局出版の仕事は断念することになったという。和田博文（前掲「紀伊國屋書店という文化装置」）はここまでの紀伊國屋の動向を次のようにまとめている。

一九三三年六月には紀伊國屋出版部が設立されている。出版部からは合計九冊の単行本が刊行された。（中略）一九三三年一〇月には『行動』が創刊され、翌年の後半から行動主義文学運動の機関誌と目されるようになる。一九三五年に行動主義関係の書籍が多いのはそのためである。（中略）だが紀伊國屋出版部にとって、『行動』は命取りになった。田辺茂一は『わが町新宿』で「行動主義ブーム」とでも言うべき時期があり、「号を追うて、雑誌のページ数も増えて、厚くなった。若い身空だから、足も弾む。天下とりのような錯覚さえおきてくる。収支の勘定など、どうでもよくなってくる」と回想している。累積する赤字は一九三五年八月に、紀伊國屋書店出版部を解散に追い込んだ。

このように最も田辺が力を入れていた雑誌『行動』が経営の足を引っぱったのであった。野口富士男の自筆年譜には「同社の赤字は当時の金額で十七万円とのこと、俄かには信じがたい」と記されている。田辺の文学青年的な気質があつてこそ可能だった意欲的な出版戦略であつたが、そこには経営者としての目線が欠け

ていたということであろう。特に『行動』の総合雑誌化をはかり拡大路線をとったことで売り上げを超えて支出が膨れ上がったのであった。この時期の『あらくれ』は雑誌としての充実期を迎えていたと言えるので、紀伊國屋の撤退は予期せぬ事故のような出来事であつたろうが、同誌についてもとても収益化できていたようには見えないので、新興の出版社がこれらの雑誌を複数抱えるということに、そもそも無理があつたのであろう。いずれにせよ、『あらくれ』は行動主義文学の流行の中で文芸市場に進出し、紀伊國屋出版部の倒産とともにそこから退却したのであつた。

おわりに

この紀伊國屋出版部時代の『あらくれ』の文学史的意義を重視する紅野敏郎（前掲「昭和十年代文学に関する一考察（上）」）は「（注・同じ紀伊國屋発行の）『行動』あるいは『レツェンゾ』のみに力点をおくことなく、『あらくれ』をも含みこむ視野を持つことによつて、昭和十年前後の文学史における彼らの比重をかなり正確に測定することができはすだ」とした上で、「『あらくれ』は、ただ老秋声の慰めの場所としてではなく、『行動』とともに、昭和十年前後の時代動向と直接重なりあつたかなり重要な広場、というふうに押えることができるはずである」と結論づけていた。今回の調査によりそのあたりの実態がある程度まで明らかになったのではなからうか。プロレタリア文学運動壊滅後の「文芸復興」の空気の中で非主流派の芸術派文壇人の拠点となり、自由主義退潮期における文壇人の運動である「行動主義」の一翼

を担った雑誌『あらくれ』の存在がより具体的に見えてきたということがある。

では、雑誌『あらくれ』の現代における研究的意義はその紀伊國屋出版部時代だけにあるかというところではないだろう。同書店が手を引いた後、女性同人たちを中心になって雑誌が編輯された時代（第四期『あらくれ』）は、それこそ今まで全く光が当たってこなかったが、雑誌としては第二の充実期と言えるような意欲的な誌面を作り上げていた。この時期の『あらくれ』については、冒頭にも記したとおり別稿を準備しているのので、本稿と併せて雑誌『あらくれ』の興亡史としてお読みいただければ幸いである。

注

- (1) 第二号とあるがこの年の第一号は存在しない。一月刊行の『あらくれ』第三輯を二巻一号と見て本号を二巻二号としたのであろう。なお今回の資料調査は原則として国会図書館所蔵のマイクロフィルムより行い、必要に応じて日本近代文学館蔵の原誌にて補った。

- (2) 海老原、玉置の二名は更生あらくれ会の名簿にのみ名前がある。

- (3) ちなみに先の三上の回想に対応する内容か、一九三四年九月『あらくれ』の「あらくれ会」欄では中村武羅夫が「テラス・コロンバンが潰れたのは、『あらくれ』同人のせみだといふゴシツプがあります、それはウソだと思ひます。テラ

スで一番多く金を散じたのは、おそらく『あらくれ』の連中ではないかと存じます」と記している。なおこの「テラス・コロンバン」は銀座六丁目角のコロンバン喫茶店の二、三軒北側にあり、その間に東京茶房が存在していたようだ（十返肇「銀座文壇地図」）。

- (4) 十返肇（当時は「十返一」）は後述する『あらくれ』の発行元となる紀伊國屋出版部が出していた広報雑誌『レツェンゾ』（一九三二年『紀伊國屋月報』として創刊）の編輯顧問を務めていた。

- (5) この女性青森出身で同郷の太宰治が通いつめていたことでも知られている（所謂「洋子事件」）。この女性をめぐる太宰と一穂については拙稿「徳田一穂と徳田秋聲―父子作家の文学的闘争と交響」（二〇二二年二月『法学新報』）で言及したことがある。

- (6) 「野口富士男戦前日記」（二〇二四年、越谷市教育委員会）の昭和十年の項目。この年は日記が残っていないが、自筆年譜によると野口は紀伊國屋出版部の廃業によって失業に追い込まれたという。

（おおき・しもん 本学教授）

三上秀吉	40	青野季吉	3	加能作次郎	1	真田喜七	1
舟橋聖一	36	川上喜久子	3	河盛好蔵	1	正宗白鳥	1
小寺菊子	36	中島健蔵	3	雅川 滉	1	西田義郎	1
山川朱実	35	保高德蔵	3	外村 繁	1	斉藤茂吉	1
室生犀星	33	木暮 亮	3	株尾正彦	1	千葉亀雄	1
徳田秋声	33	和田 傳	3	茅野蕭々	1	相馬御風	1
阿部知二	28	宇野浩二	2	亀井勝一郎	1	多田鉄雄	1
小金井素子	28	円地文子	2	吉屋信子	1	太宰 治	1
徳田一穂	28	吉田精一	2	宮本百合子	1	大鹿 卓	1
豊田三郎	27	高木 卓	2	高浜虚子	1	中村地平	1
岡田三郎	26	今日出海	2	近藤一郎	1	中谷孝雄	1
檜崎 勤	25	上林 暁	2	窪川鶴次郎	1	中野重治	1
中村武羅夫	24	杉山平助	2	栗田三蔵	1	中里恒子	1
榊山 潤	23	生田花世	2	原奎一郎	1	仲町貞子	1
上司小剣	20	石坂洋次郎	2	古沢安二郎	1	猪熊弦一郎	1
小城美知	19	川崎長太郎	2	戸川秋骨	1	張 赫宙	1
野口富士男	19	大田洋子	2	荒木 巍	1	長谷川時雨	1
田辺茂一	18	坪田譲治	2	高橋健二	1	長田恒雄	1
尾崎士郎	18	田村泰次郎	2	高橋広江	1	長田秀雄	1
井伏鱒二	17	湯浅克衛	2	今 春曉	1	鎗田研一	1
安成二郎	8	藤森成吉	2	佐藤俊子	1	辻村もと子	1
今井邦子	8	梅津勝夫	2	佐藤春夫	1	島崎藤村	1
森田たま	6	尾崎一雄	2	細田源吉	1	島木健作	1
飯島正	6	武野藤介	2	坂本 浩	1	徳永 直	1
板垣直子	5	武林無想庵	2	山口年臣	1	鍋島道子	1
宮地嘉六	4	片岡良一	2	山内せい子	1	南川 潤	1
阪本越郎	4	矢ヶ部至	2	山内義雄	1	百田宗治	1
春山行夫	4	林美美子	2	山本有三	1	武田麟太郎	1
上泉秀信	4	伊庭 孝	1	市島春城	1	平松幹夫	1
浅原六郎	4	伊藤 整	1	寺崎 浩	1	平塚らいてう	1
丹羽文雄	4	伊藤永之介	1	渋川 驍	1	平林たい子	1
中河与一	4	伊藤基彦	1	小松 清	1	米川正夫	1
板垣鷹穂	4	永松 定	1	小島政二郎	1	片岡鉄兵	1
福田清人	4	永田逸郎	1	小堀杏奴	1	片山敏彦	1
本多顯彰	4	塩田良平	1	庄野誠一	1	芳賀 檀	1
芹澤光治良	3	塩入亀輔	1	松本辰雄	1	北村小松	1
近松秋江	3	岡崎秀穂	1	新田 潤	1	牧野信一	1
佐藤 朔	3	岡山 東	1	森山 啓	1	堀口大学	1
十返 一	3	岡田頑子	1	深尾須磨子	1	野上彌生子	1
新居 格	3	岡本かの子	1	真杉静枝	1	矢崎 弾	1
						林 麟	1
						鈴木彦次郎	1

資料：『あらくれ』寄稿者全162名の執筆回数順
リスト（あらくれ会欄・後記を除く）